日本博を契機とした障害者の文化芸術フェスティバル
in 近畿ブロック＆グランドフィナーレ

アール・ブリュット　-日本人と自然-
BEYOND

全国７地域を巡回した展覧会は、はじまりの地・滋賀でフィナーレを迎える

2020 年 2 月、滋賀県において、「アール・ブリュット－日本人と自然－」展が開催されました。それから 2021 年 12 月まで、この展覧会は全国 7 地域を巡回し、各地に独創的な表現を届けてきました。2 年の旅路の中で様々な出会いを果たし、アップデートした同展ですが、2022 年 2 月、はじまりの場所にして最終目的地でもある滋賀県に、「Beyond」という言葉を加えて、戻ってきます。

旅路の中で出会った各地域の 20 名のアーティストを紹介する「Traveling―巡り合いの中から」、これから先=Beyond を見据える創造の形を浮かび上がらせる 6 組の表現で構成する「共同創造―新しいクリエイションのかたち」、この 2 つのセクションで、150 点に及ぶ作品を展示します。

■開催日程：2022 年 2 月 11 日（金・祝）－3 月 21 日（月・祝）
■開催時間：11:00～17:00
■休催日：月曜日（3 月 21 日除く）
■会場：ボーダレス・アートミュージアムＮＯ-ＭＡ（滋賀県近江八幡市永原町上 16［旧野間邸］、旧増田邸（滋賀県近江八幡市仲屋町中 4）、まちや倶楽部（滋賀県近江八幡市仲屋町中 21）

■展覧会の見どころ

①「Traveling―巡り合いの中から」では、フェスティバルの集大成として、**20 作家の作品が全国各地から集結**

②これから先＝**BEYOND を見据える創造の形**を浮かび上がらせる「共同創造―新しいクリエイションの形」を 6 組の表現で構成

③広瀬浩二郎氏（国立民族学博物館）と、**「見る」以外の方法でも楽しめる作品鑑賞を共同で企画**

展覧会概要

タイトル　アール・ブリュット -日本人と自然- BEYOND

会　　場　①ボーダレス・アートミュージアムＮＯ-ＭＡ（滋賀県近江八幡市永原町上 16）

②旧増田邸（滋賀県近江八幡市仲屋町中 4）

③まちや倶楽部（滋賀県近江八幡市仲屋町中 21）

会　　期　2022 年 2 月 11 日(金・祝)～3 月 21 日(月・祝)

開催時間　11：00～17：00

休 催 日　月曜日（3 月 21 日は除く）

出 展 者　浅野春香 / 穴瀬生司 / 今村花子 / 大井康弘 /葛西孝之 / 小林靖宏 / ごまのはえ＋ 芝田貴子 / 坂本三次郎＋椎原保 / 杉浦篤 / 鈴村恵太 / 高橋舞 / 高丸誠 / 田中乃理子 / 鶴川弘二 / 中武卓 / 中山正仁 /西澤彰 / ノナカミホ / 廣川照章 / 藤田雄 / 曲梶智恵美 / 升山和明 / 水沼久直 / 宮井英寿 / 森川里緒奈 / 森脇高弘

企画協力　広瀬浩二郎（国立民族学博物館グローバル現象研究部 准教授）

観 覧 料　共通券 500 円（450 円)、高大生 450 円（400 円)、一館チケット 200 円

※障害のある方と付添者 1 名無料、中学生以下無料 ※（　）内は 20 名以上の団体料金

主　　催　文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会、日本博を契機とした障害者の文化芸術フェスティバルに向けた全国会議、日本博を契機とした障害者の文化芸術フェスティバル近畿ブロック実行委員会

共　　催　2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けた障がい者の芸術文化活動推進知事連盟、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール

後　　援　滋賀県教育委員会、大津市、大津市教育委員会、近江八幡市、近江八幡市教育委員会

協　　力　あいち清光会 サンフレンド、青葉仁会、アートステーションどんこや、有田ひまわり福祉会、あーるど、YELLOW、近江八幡観光物産協会、クリエイティブサポートレッツ、クリーニングの相互 仲屋営業所、グループホームわくわく、国際芸術祭 BIWAKO ビエンナーレ実行委員会、しあわせ作業所、信楽青年寮、しみんふくし滋賀、障害者支援施設　愛隣館、静内ペテカリ生活支援センターガーデン、すたじおぽっち、創作ヴィレッジこるり村、みぬま福祉会 工房集、もうひとつの美術館、もみの木福祉会、当麻かたるべの森、やまなみ工房、藁工ミュージアム

【問い合わせ　/　掲載用写真貸出・取材】
日本博を契機とした障害者の文化芸術フェスティバル 近畿ブロック実行委員会　事務局
社会福祉法人グロー　法人事務局芸術文化部（ボーダレス・アートミュージアムＮＯ-ＭＡ）
担当：赤澤・西野　　〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦 4837-2
TEL：0748-46-8100　FAX：0748-46-8228　MAIL：creationnippon@gmail.com

2つの会場と出展者

■ボーダレス・アートミュージアムNO-MA（近江八幡市永原町上16）

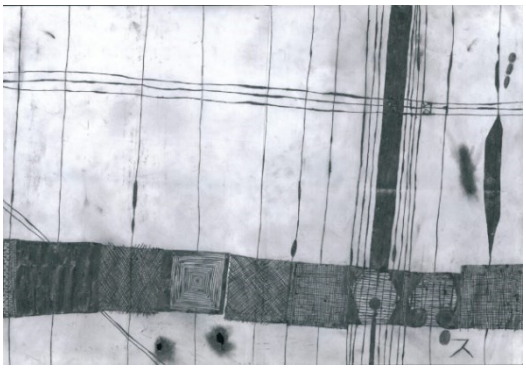
会場テーマ：Traveling ―巡り合いの中から

（1）田中乃理子　Tanaka Noriko **1979-　三重県在住** 田中は、20年以上にわたり、縫いによる制作を続けている。制作は、数ある色の中から5色もしくは7色の糸を選ぶことから始まる。選んだ糸を一組として使用し、一筋ごとに色を変え、隣に沿わせて慎重に縫い進めていく。縫い目には留めがなく、ただまっすぐに縫っている様にも見えるが、始めと終わりには一度返し縫いをし、引っ張っても抜けないようにと工夫が施されている。目の揃った緻密な縫いは、月日をかけ布の端から端へと帯状に広がりやがて面となる。また、その過密な縫いが布を引っ張り、それにより生じる全体的なゆがみは、視覚的な味わい深さへとつながっている。	 《五色の色とその他の色》 2010
（2）藤田雄　Fujita Yu **1971-　奈良県在住** 藤田は長年、数字や鬼などをモチーフにした作品などを制作している。数字の作品では、数字の形を活かしながら、そこに動物を当てはめていく。1はペンギン、2はあひる、3はパンダかたぬき、というように数字ごとに動物が決まっている。ただし、パンダに夢中になったある時期は、すべての数字がパンダになったそうだ。 また、《鬼の面》は、細かく切った色紙を丁寧に厚紙に貼り合わせて形作る。瞳の☆マークや眉毛、歯の描き方など、数字の作品と共通する点も見受けられる。以前は節分の時期に合わせて作るものだったが、今では材料が手に入るといつでも制作している。 本展では、数字と鬼の作品のほかにも、紙箱に描いた作品など、藤田の世界観が感じられる作品を展示する。	 《618のおかあさんライオンと ぺんぎんとぱんだちゃん》 2011頃
（3）穴瀬生司　Anase Seiji **1966-　大阪府在住** 紙面を線や図形で埋めるようにして描く。繰り返し描き重ねていくことで、部分的に色溜まりとなる。その行為が、イメージを複雑化させ、画面全体に力強さを生み出している。また、画面をよく見ると、作者の名前に由来する「あ」「な」「せ」という文字が多く潜んでいることに気づく。「自分の名前を書く」という他者に自身の存在を伝える手段が、絵を成立させる要素となっているとともに、躍動的なリズムも作り出している。 2017年からは、小さな木製パネルに電子部品を配して、地塗り剤を塗り、繰り返しやすりをかける作品も作っており、制作は彫刻的なアプローチへと向かっている。	 無題　2016

（4）宮井英寿　Miyai Hidetoshi

1998-　和歌山県在住

縦と横に引いた線を活かしながら、企業のロゴマーク、テレビ局のキャラクターなど、自らの関心と結びつきの強いモチーフを描く。
使用される画材は紙と鉛筆。紙面を刻むかのような力強いタッチが特徴であり、また、線を一本引くにしても注意深く描写していることがうかがえる。画面の中でいくつか見受けられるぼんやりとした箇所や穴は、指でこすることによってできている。柔らかなぼかし表現と硬質な筆致の組み合わせが、画中に余韻を生み、観る者の眼を惹きつける。
線がところどころ膨らんでいるのはなぜか、“ス”が何を意味しているのか――宮井の絵には謎めいた点が多く見受けられるが、それらを含めて興味を持たせる魅力がある。



無題 2021

（5）大井康弘　Oi Yasuhiro

1982-　滋賀県在住

大井は、主にコラージュと粘土による作品を制作している。コラージュについては、身体的なパーツや骸骨、アニメを思わせるキャラクターなどが要素として扱われ、プライベートな時間の中で作られる。なお、大井は、コラージュした原画よりも、コピー機で複写したものの方に価値を見出しているようである。

粘土作品も平面作品と同様に、いくつかのパーツを組み合わせて作られる。《ガネーシャ》では、腕や鼻、装飾品など個別のパーツが、上層へ上層へと重ねられ、形作られるため、モチーフの原型がないような、複雑な像として具現化される。さらに、自らの体毛や木の実などを入れることも粘土作品の特徴といえる。それらの素材をティッシュで包み、新聞紙で覆い、ガムテープでぐるぐる巻きにしてできた芯材の上に粘土を足していく、という独自の方法を経て、作品は少しずつ肉付けされていく。

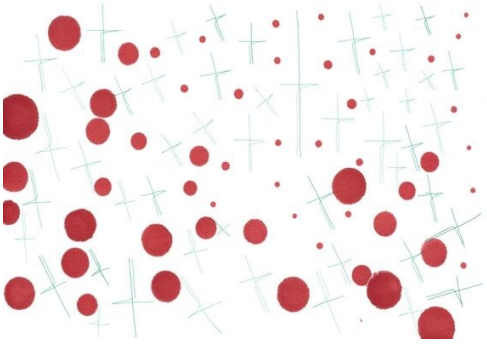
《ガネーシャ》2013

（6）廣川照章　Hirokawa Terufumi

1982-　京都府在住

廣川が暮らすグループホームの自室には、膨大な量の「箱」が積まれている。それらは廣川がスーパーなどで入手し、組み立てた段ボール箱だ。寝る場所やそのほかのわずかなスペースを除き、すべて箱。自然光が遮られ、圧迫感もあるが、廣川はそれを苦にしている様子はないようだ。支援者によれば、箱は「命より大切なもの」とのことで、箱があるからこそ、安心した生活が営めるのだろう。現在も箱は、1日1、2個のペースで生み出され、共有スペースにも積み上がっている。増殖する箱にホームのスタッフは困惑しつつも、廣川の意思を尊重し、共存の道を探っている。
本展では、許可を得て一箱だけ開封させていただいた。中身は、廣川が自室で細かく切った紙類。箱の中にはほかにも、お菓子のパッケージや日用品の容器など様々なものが分類して入れられている。

《箱》2021-2022

（7）鶴川弘二　Tsurukawa Koji **1973-　兵庫県在住** ドットや文字、図形などが織りなす、軽やかで浮遊感のある画面構成を特徴としている。大小のドットは、油性ペンをにじませて描く。理想のサイズのドットにするため、コップなどにペンを立てかけるなど、長時間にじませるための工夫を施すこともある。また、画面には、自らの感情を反映した言葉や、身近な人に言われた言葉を書き入れる。誰かに注意されたことなど、苦い経験として残っていることを書くことが多いが、優しい言葉や意外性のある言葉を記すこともあり、観る者の想像を掻き立てる。 また、鶴川は一時期、ペンとセロハンテープを素材とした、丸みのある立体物を制作していた。アンティーク家具の脚を思わせるこの作品は、ペンの上部から先端までをテープで順番に巻き付けていくことで、形作られている。	 無題 2011 年頃
（8）中武卓　Nakatake Suguru **1996-　宮崎県在住** 中武が描くのは、眼に写るものすべて。小学生の頃から、身辺な人物、風景、動物などを対象として、数多くの絵を描いてきた。出展作品のモチーフである花瓶は、14 歳の頃から繰り返し描いてきたモチーフだ。B1 サイズの紙に画面いっぱいに描いた画面には躍動感があり、モチーフや色など、全部の構成要素が、同時に目の中に飛び込んでくるかのようだ。 花瓶を描く時、中武は最初に瓶のアウトラインから描く。そして、モチーフを慎重に観察すると、唐突に茎が伸び、葉、花びらを形作っていく。その制作のテンポにはスピード感があり、描く草花は画面の中で勢いよく成長し、生い茂っていく。	 《クルンクルン》2021
（9）曲梶智恵美　Magarikaji Chiemi **1981-　熊本県在住** 高校 2 年時に油絵や手芸、園芸、文章などの制作を始める。以降、レースや毛糸で編んだもの、リボンなどをキャンバスに貼り付け、その上から油絵具で彩色する独自の画面を作ってきた。編んだ糸や紐が創り出す、渦巻や逆 U 字型のうねるような勢いの線が力動感を引き出し、加えられた原色の色彩がそこに輪をかけて力強い形象を生みだしている。淡い色彩や沈み込む暗色も含まれているが、それらが組み合わされ独特の陰影が醸し出されているのだ。曲梶智恵美はこの立体感のある作品のほかに、自身で栽培した植物の写真を撮影し、それらと印刷物から拾い出し、画像の断片を組み合わせたコラージュも制作している。	 《花》制作年不詳

（10）水沼久直　Mizunuma Hisanao

1972-　岩手県在住

幼い頃からクレヨンなどで絵を描くことを楽しんでいた水沼は、高校時代に油彩画に出会い、表現の幅を大きく広げることとなった。

その後、自宅の建て替えなどにより制作環境が制約された一時期に、サインペンによる描画を始める。画材の変化は水沼の描法に大きな変化をもたらし、緻密な色彩のハーモニーに満ちた作品が精力的に生み出されるようになった。
モチーフは身近な風景、山や動物たちなどの自然、アニメやマンガの登場人物などがあり、水沼の関心の幅広さがうかがえる。
火山研究をしている叔父の影響などもあり、自然災害への関心も高かった。2011 年の震災で伯母を亡くした経験は水沼の内面を深く揺さぶり、大自然の恐るべき力とその後の復興を描いた連作を制作した。

《完全なふっかつのつなみ》
2013

（11）葛西孝之　Kasai Takayuki

1959-　青森県在住

高校を卒業してから創作活動を始めた。昔から海釣りが好きだった葛西だが、車を運転しないため実際に行くことは容易にかなわなかった。海で釣りをしたい――その欲望を絵の制作で満たしていると葛西は語る。作品のテーマは釣りだが、新聞から様々な情報を得ることで、イメージは現実ではありえない世界へと大きく拡大していき、宇宙で釣りをしたり、月を掃除したりするなど、多彩な場面を描くようになっていった。
「長年狭いところに住んでいるから未知の世界への探究心が抑えられない」と言う葛西。多くの作品は夜に描かれたという。住環境や活動域といった空間的制約による閉塞感をばねにしたのだろうか、葛西の空想は星や月の浮かぶ闇夜に飛び出した。画風のかわいらしさ星や月の壮大さが相まって、独自の宇宙譚が構築されている。

無題　制作年不詳

（12）浅野春香　Asano Haruka

1985-　宮城県在住

浅野の作品を構成するのは、身近な人物や植物、動物といった画題と、幾何学の模様、無数のドットである。カラフルに彩ることも、単色で表現することもあり、いずれも、異次元に吸い込まれていくような心象風景として描かれていく。本展では､英語でサンゴを意味する Coral をタイトルにした《コオラル 2》と、動物と植物が一体化したような作品《チアード怖い》を展示する。
《コオラル 2》は、紙製の米袋を支持体として、約 3 か月かけて描かれた。古生物学者である浅野の父親が、サンゴの研究をしていたことが、着想源となっている。画面中央の黄色い丸は月。満月に近い夜に一斉に産卵するサンゴの習性を表現している。

《コオラル 2》2021

■旧増田邸（近江八幡市仲屋町中４）

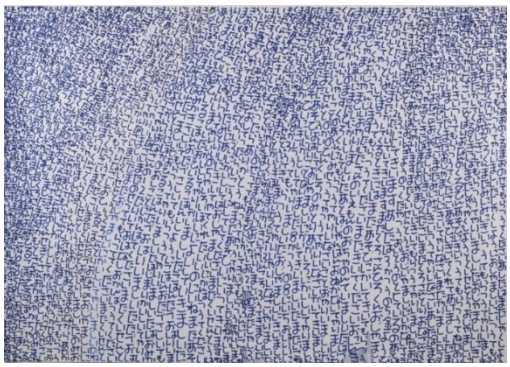
会場テーマ：Traveling ―巡り合いの中から

（13）高橋舞　Takahashi Mai **1991-　静岡県在住** 高橋は通っている福祉施設にある備品から、その日のお気に入りの物を見つけては、それにガムテープを貼っている。トントンと指で物を弾き、音や感触を確かめながら貼っていき、納得のいく物（まいちゃんのいいもの）が出来ると家に持ち帰る。このほか、輪ゴムでぐるぐる巻きにすることや、ぎゅうぎゅう詰めにすることでも、「いいもの」はできあがる。 施設ではその日の「いいもの」を 1 日ひとつずつ貸し出している。貸し出しできない物の場合、スタッフが高橋と交渉し、あるスタッフは「いいもの」を代わりに作り、あるスタッフは「いいもの」を外へ探しに行く。交渉には丸一日かかることもあるという。貸し出し帳からは高橋とスタッフとのやりとりを見ることができる。	 無題＜いいものシリーズ＞ 2012-2013
（14）升山和明　Masuyama Kazuaki **1967-　愛知県在住** 升山は現在入所している施設のクラブ活動と、小学生の頃から通っている絵画教室で制作している。10 年以上前から淡々と取り組んできた作品に繰り返し登場するのは、地元のデパート「清水屋」や「タクシー」、あるいは「犬」といったモチーフ。色画用紙に描いた絵を切り抜いて貼り重ねたコラージュによる作品である。ここには絵の「画題」が次の絵の「素材」となり、画面上に再構成されるという流れがある。この特徴的な制作方法によって、独自の奥行きや色あい、リズミカルで重層的な動きが生まれている。「描」「版」「貼」といった技法が、長年の制作の中で独自の表現へと培われ、愛着のあるものをイメージの世界で存分に遊ばせることが可能となっていった。	 《清水屋とタクシーたち》 2017
（15）ノナカミホ　Nonaka Miho **1991-　山梨県在住** 使用される画材は黒のボールペン。真っ白な支持体に下書きをせずに描き始める。次々と連鎖していくように形を描き、モノクロームの世界は少しずつ広がっていく。緻密に描かれた画面は、うごめくような感覚をもたらし、観る者の眼を惹きつけて離さない。 以前は無心にペンを走らせて一気に描いていたが、現在は時折立ち止まりながら時間をかけて制作するようになったという。この変化について、ノナカミホをよく知る美術家、上野玄起は、「画面上で変化する作品と対話する時間を大切にするようになり、一人の作家として自分の絵を変化させていきたいという思いが芽生えたのではないか」と語っている。	 無題　2020

（16）森川里緒奈　Morikawa Riona

1998-　埼玉県在住

紙面を埋める青い文字は、森川の日々の出来事が綴られている。会話や外出した時のこと、好きなこと、友人のこと、数字のことなど思い浮かんだことを次々と綴っていく。また文字の隙間を埋めるように不思議な形の模様や点々を加えていく。
森川はだれかと話しをすることが好きで、家族や森川が所属する福祉施設のスタッフ、そこに訪問した人との会話をいつも楽しみにしている。そして、そこで交わされた言葉がまた画中の文字となって現れていく。色は青がもっとも気に入っている。その理由については、スタッフは、「外出時に乗る電車の青いラインから来ているのではないか」と話している。



《日々の出来事》制作年不詳

（17）森脇高弘　Moriwaki Takahiro

1972-　鳥取県在住

森脇は福祉施設の活動の中で制作を行っている。活動に参加した当初は制作に興味がない様子であったそうだ。しかし 2010 年、スタッフが目の前に画材を置いてみたところ突然描き始め、画用紙いっぱいに沢山の色を塗り重ねることに夢中になっていった。以降、日々黙々と制作に取り組んでいる。午前中のみ制作し、12 時ぴったりに制作を終えるのが森脇のスタイルだ。軽快なタッチでカラフルに描かれる作品は、森脇の感情が可視化されるような印象を観る者に与える。

無題　2016

（18）中山正仁　Nakayama Masahito

1950-　高知県在住

中山が絵を描くようになったのは、26 歳の頃。入院していた病院で、看護師に描き方を教えてもらったそうだ。その後、住んでいたアパートの隣にアトリエを構えた。そこでは、かつて見た風景や花、動物、女性像など、多岐にわたる絵を描いていった。
《外国航路》では、点描によって統一感のある画面を作り出している。画面全体を覆うドットは、海面に降り注ぎ反射する光の粒。その中を一隻の船舶が航海している。本作は、18、19 歳の頃、海外から船で運ぶ仕事に携わった時に見た風景であり、脳裏に刻まれた忘れることのできない光景であるという。《石》もまた、点描を用いた作品であり、共に情感あふれる作品となっている。

《外国航路》制作年不詳

（19）高丸誠　Takamaru Makoto **1970-　北海道在住** セロハンテープで成形したメガネフレームは、上から油性マーカーで塗装し、15 分程度で完成する。これらはすべて自ら装着するために作られた。これまで同じものを数千点と作り続けており、そのメガネかけて日常を過ごすことも多い。 また、高丸は幼い頃の写真を模写することも日課としている。さらに、オリジナルの写真や模写した絵をコピー機で複製し、それを再び模写するなど、複製と模写を何度も繰り返していく。複写の過程で消えたり欠けたりした部分は、ボールペンやクレヨンで加筆し、セロハンテープで補強したり表面をコーティングする場合もある。描いた作品はフエルアルバムに収めて保管している。	 無題　制作年不詳
（20）小林靖宏　Kobayashi Yasuhiro **北海道在住　1984-** 小林は、札幌の大通公園の変わりゆく街並みを、1997 年から 2003 年にかけて断続的に描いた。それらの風景は、あたかも記憶が薄れていくかのように、建物が消えていき、年々、余白が目立つようになっている。特筆すべきは、描く個所が減っているのにも関わらず、描画のクオリティは変化していないということ。そうした制作の視点に、小林が何より重視するリアリティがあるように思われる。作品は、主にボールペンを使い、実在するものを正確に描く。近年は、写真やポストカードなどを参考にしながら、建造物やタレントのポートレイトなどを描いている。	 1997

■まちや倶楽部（近江八幡市仲屋町中 21）

会場テーマ：共同創造-新しいクリエイションのかたち

（21）ごまのはえ+芝田貴子 **Gomanohae+Shibata Takako** **1977-　大阪府在住　／1973-　滋賀県在住** ごまのはえは 1999 年、劇団「ニットキャップシアター」を旗揚げし、現在も活動する劇作家、演出家、俳優である。芝居や語り、ダンスなど、様々な舞台表現と「言葉」を巧みに組み合わせた、イマジネーションあふれる作品を発表している。 また、芝田は、自身が「お母さん」と呼ぶ人物像を描き続けている。青いスーツ、4 色に塗り分けられた瞳など、決まったスタイルの「お母さん」は、一度見たら忘れることのできないような強い印象を与える。 《私の一日》は、「ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭　ちかくのまち」※で発表されたオーディオドラマである。ごまのはえが芝田の絵に着想を得て、書き	 《お母さん》1996-

下ろしたもので、“お母さん”をめぐる不条理かつユーモラスな物語に仕上がっている。本展では、当時の展示をそのまま再現するのではなく、多彩な鑑賞体験が得られるインスタレーションとして再構成した。会場をめぐりながら物語を聞き、また、原画の触図などを手でさわって楽しむことができ、視覚以外の感覚も使って鑑賞することの可能性を広げる展示になっている。

※「ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭　ちかくのたび」(2019／ボーダレス・アートミュージアムNO-MA他／滋賀)

（22）坂本三次郎＋椎原保

Sakamoto Sanjiro+Shiihara Tamotsu

1921-2016　岩手県／1952-　京都府在住

坂本は、暮らしていた福祉施設の空き地で、新たな「空間」を作り出す行為を、20 年以上行っていた。葉っぱや石、木、コンクリートブロックなど、身近にある材料を拾い集めてきては、枠を形作るかのように並べ、何度も配置を変えながら並べ続けた。
美術家の椎原もまた、鏡や光など日常の中で関わりの深いものを素材として、それらを配置する。場所や人の感覚、モノがもつ記憶を結びつけるようなインスタレーションを制作してきた。

2020 年、「ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭　ちかくのまち」※において、椎原は西の湖のほとりに、坂本の行為を着想源とした空間を作り出した。制作にあたり椎原は、坂本の行為を写した写真や、生前、坂本をサポートしていた職員の証言を手掛かりにして、坂本の制作動機を探っていく作業を行った。使う素材は、会場周辺で拾ったものに限る――これは、坂本の思考回路をなぞる中で、椎原が立てた方針である。場所も違えば集まるものも異なることから、椎原は坂本の作品を完全に再現するのではなく、「もし、この場所に坂本さんがいたら……」と想像しながら、坂本になりきって、空間を作っていった。

※「ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭　ちかくのまち」(2020／ボーダレス・アートミュージアムNO-MA他／滋賀)

椎原保[坂本三次郎になりきって空間を作る]　2020

（23）鈴村恵太　Suzumura Keita

1997-　滋賀県在住

鈴村は、高速道路の看板に書かれている地名のフォントに、大きな関心を持っている。それは、旧日本道路公団オリジナルの書体である「公団文字」と呼ばれるもので、パソコンにこのフォントが無かったことをきっかけに、独自に文字の制作が始められた。制作は今も継続して行われており、文字の種類は今も増え続けている。
鈴村は 2020 年、「文字模似言葉（もじもじことのは)」展※において、《迷甲乙の恋》を発表した。本作は高速道路の看板を模したもので、鈴村の秘めたる感情を、暗号のようにして投影した作品である。この作品の制作で鈴村は、大元となるデザインを手掛けた。また、NO-MA学芸員は看板の設

《迷甲乙の恋》2021

計や施工方法などを業者と調整し、鈴村が所属する事業所の施設長は、鈴村と学芸員とのコミュニケーションが円滑に進むようサポートした。看板制作のためのプロジェクトチームのような体制が自然と生まれ、三者が都度、状況を共有しながら作品は少しずつ形になっていった。

※「文字模似言葉（もじもじことのは）」（2021／ボーダレス・アートミュージアムＮＯ-ＭＡ／滋賀）

（24）今村花子　Imamura Hanako

1979-　京都府在住

今村は、夕食で配膳された食べ物やお菓子を畳やテーブルに配置する行為を約 30 年にわたって続けていた。本展では、それらの配置行為の跡を彼女の母親が撮影した写真と、地元の絵画教室で制作した絵を展示する。
写真を見ていると、決して無造作に配置したのではないことが読み取れる。お米とおかずの均整の取れた組み合わせ、果実の向きを揃えた配列、素材ごとに整理した配置など。それらはすべて彼女の繊細な感覚によって行われている。
今村の表現行為を最初に評価したのは彼女の母親であった。母親は、今村の表現を否定せず、むしろ愛着を抱き、毎日「記録」する形で関わり続けた。撮影時間が夜ということもあり、薄暗い写真やピントが合っていない写真が散見される。しかし、それが記録物としてのリアリティを醸し出している。

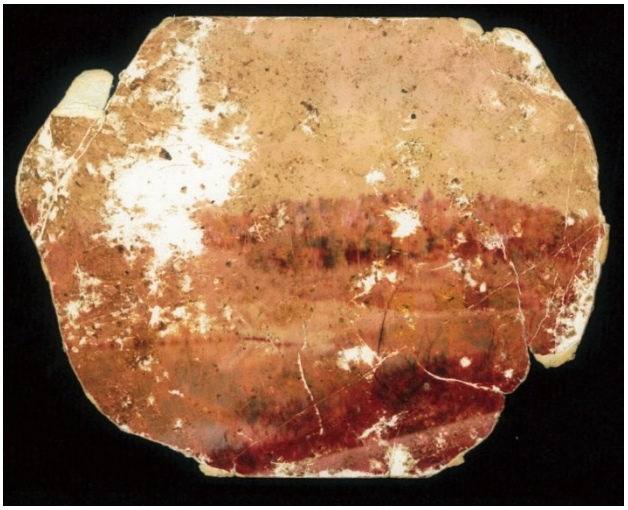
無題　1995-

（25）杉浦篤　Sugiura Atsushi

1970-　埼玉県在住

展示しているのは、杉浦が長い年月をかけて触ってきた写真である。紙自体が劣化し、セピア調の色合いになっていることに加え、触ってきた箇所は表面が磨耗して部分的に下地が晒されている。写真が映すのは、旅行の記録やとある日常の 1 ページなど、パーソナルなものである。杉浦は自由な時間にのんびりと写真を見たり、そわそわしている心を落ち着けるために写真と向き合ったりする。好きな人、場所、気になる被写体については特に執拗に指で撫でることも習慣的な行為の一つである。写真の中の世界に思いを寄せるその行為が蓄積し、形になったものが彼の作品といえるだろう。
本展では、2020 年、「ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭　ちかくのまち」※での展示を再現する。この展示は、しが盲ろう者友の会との共同のもと、鑑賞方法の可能性を考えるプロジェクトの中で具現化した。目の見えない、見えにくい人と一緒に味わえるよう、作品の現物のほかに、自分が見たい大きさに拡大・縮小できる非接触デジタルツールや、作品に出てくる実際の物などを展示している。

※「ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭　ちかくのまち」（2020／ボーダレス・アートミュージアムＮＯ-ＭＡ他／滋賀）



《Untitled》　1992-

（26）西澤彰　Nishizawa Akira **1969-　群馬県在住** 西澤は、幼い頃に通っていた福祉施設の近くの飛行場から機体が離着陸する様子を、時間を忘れてずっと眺めていたという。描かれる機体の種類は 5 種類程度で、これらを様々な角度から観察することによって、図版や写真では得られない豊かな表情を生み出している。 また、《ピックポケット》や《視床》といった作品で知られる美術家、長重之は、西澤の制作に惚れ込み、交流を持っていた。縦に 13 点、横 15 点、計 195 点からなる出展作品は、2004 年に開催された展覧会※で展示するため、長によって裏打ちされた、壁面全体を覆うインスタレーションである。裏打ちに使用されている帆布は、長が自らの作品で頻繁に使用した、長の代名詞といえる素材である。帆布の上に並べることで、長は西澤の制作と自身の制作を重ね合わせようとしたといえる。二人の交流は長が亡くなるまで続き、このほかにも共同による絵の制作も行われた。 ※「西澤彰絵画展」（2004／ロートルメゾン西ノ洞／群馬）	 《飛行機との対話》　2004

■本展における新型コロナウイルス対応について

来場される方には、以下の対応をお願いします。

・体調不良（発熱・咳・咽頭痛・味覚障害などの症状）のかたはご来場をご遠慮いただきます。

・マスク着用、こまめな手洗い、アルコール等による手指消毒をお願いします。

・観覧中は、他の人と接触しない程度の間隔を確保してください。（障害のある方などの誘導、解除を行う場合は除きます）

・来場者が多い場合は、入場を制限させていただくことがあります。

・大きな声での会話はご遠慮いただきます。

主催者として、以下の新型コロナウイルス対策を徹底します。

・スタッフは毎日、検温・体調確認を行い健康管理に努めます。

・スタッフはマスク着用の上で案内します。また、こまめな手洗いを行います。

・会場内のドア、手すり、トイレなど、手を触れられる箇所の消毒を強化します。

・会場内は密閉した空間にならないよう、定期的に換気を行います。

■関連イベント

「広瀬浩二郎さんとさわる！つくる！」

共同創造した鑑賞体験のコーナーを、広瀬さんとともに体験したり、関連する創作体験を行うイベントです。※2 月 23 日（水・祝）を予定していましたが、新型コロナウイルス拡大を受けて、日程を変更しました。

日時：2022 年 3 月 9 日（水）、11 日（金）

定員：各 5 名（要予約）

集合：ボーダレス・アートミュージアムＮＯ-ＭＡ

広報用画像申込書

日本博を契機とした障害者の文化芸術フェスティバル
近畿ブロック実行委員会 事務局
社会福祉法人グロー 法人事務局芸術文化部
（ボーダレス・アートミュージアムNO-MA）広報宛
FAX：0748-46-8228

本展覧会広報用素材として、作品画像を用意しております。
ご希望の際は下記申込用紙に必要事項をご記入の上、FAXまたはメールにてお申し込みください。
なお、写真の使用に際し、以下の点をご注意ください。
（1） キャプションは、作家名、作品名、制作年を必ず表記ください。
（2） 作品のトリミング、文字載せはお控えください。
（3） 本展記事をご紹介いただく場合には、恐れ入りますが情報確認のための校正、掲載誌（紙）、DVD、CD 等をお送りください。

媒体名：

『　　』

種別：	TV ラジオ 新聞 雑誌 フリーペーパー ネット媒体 携帯媒体 その他	発売・放送予定日：	
御社名：		ご担当者名：	
E メールアドレス：		＠	
ご住所：	（〒　　－　　）		
お電話番号：		FAX：	

□	①田中 乃理子	《五色の色とその他の色》2010
□	②藤田 雄	《618 のおかあさんライオンとぺんぎんとぱんだちゃん》2011 頃
□	③穴瀬 生司	無題 2016
□	④宮井 英寿	無題 2021
□	⑤大井 康弘	《ガネーシャ》 2013
□	⑥廣川 照章	《箱》2021-2022
□	⑦鶴川 弘二	無題 2011 年頃
□	⑧中武 卓	《クルンクルン》2021
□	⑨曲梶 智恵美	《花》制作年不詳

□	⑩水沼 久直　　《完全なふっかつのつなみ》 2013
□	⑪葛西 孝之　　無題 制作年不詳
□	⑫浅野 春香　　《コオラル 2》 2021
□	⑬高橋 舞　　無題＜いいものシリーズ＞ 2012-2013
□	⑭升山 和明　　《清水屋とタクシーたち》 2017
□	⑮ノナカミホ　　無題 2020
□	⑯森川 里緒奈　　《日々の出来事》制作年不詳
□	⑰森脇 高弘　　無題 2016
□	⑱中山 正仁　　《外国航路》 制作年不詳
□	⑲高丸 誠　　無題 制作年不詳
□	⑳小林 靖宏　　1997
□	㉑ごまのはえ＋芝田貴子　《お母さん》 1996-
□	㉒坂本三次郎＋椎原保　　椎原保［坂本三次郎になりきって空間を作る］2020
□	㉓鈴村 恵太　　《迷甲乙の恋》 2021
□	㉔今村 花子　　無題 1995-
□	㉕杉浦 篤　　《Untitled》 1992-
□	㉖西澤 彰　　《飛行機との対話》 2004

ご希望の図版番号に✔をおつけください。

【問い合わせ　/　掲載用写真貸出・取材】
日本博を契機とした障害者の文化芸術フェスティバル 近畿ブロック実行委員会　事務局
社会福祉法人グロー　法人事務局芸術文化部（ボーダレス・アートミュージアムＮＯ-ＭＡ）
担当：赤澤・西野　　〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦 4837-2
TEL：0748-46-8100　FAX：0748-46-8228　MAIL：creationnippon@gmail.com